

第1分科会「地域社会活動の活性化」

コーディネーター：伊藤 実（高齢社会NGO連携協議会 理事）

パネリスト：

佐々木 照子（高齢社会をよくする女性の会）

杉 啓以子（江東園ケアセンター「つばき」施設長／経営企画管理本部 本部長）

丹 直秀（さわやか福祉財団 常務理事）

渡邊 武（浦安市民生委員児童委員協議会 会長／浦安市社会福祉協議会 理事）



伊藤 第1分科会「地域社会活動の活性化」を開会いたします。私は高連協の伊藤実でございます。

まず簡単に自己紹介をさせていただきます。私は、60歳でサラリーマンを定年退職いたしまして、その後、これからの高齢化時代をシニアがどう社会参加するかという社会参加運動の組織づくりとかを14年やっております。高連協に加盟してからも8年ほどになります。

認知症予防講座や、ひとり暮らしの応援セミナーというようなものをいろいろ企画運営しております、これからも地域支援を中心としてお手伝いしながら、シニアの共存マーケットみたいなものを探し続けようと思っている次第でございます。



さて、今日のこの分科会は、午前中からもかなり勉強いたしましたけれども、国は新しい成長戦略で「全員参加の社会」ということを掲げております。労働力人口が減る中で、超人手不足社会は大きな日本の課題でございます。特に女性や高齢者の社会進出が期待されているということで、過日も2014年度の経済財政白書で、高齢者については働く意欲の高い高齢者が多い。定年年齢の柔軟化、あるいは健康寿命を延ばす取組で労働参加を促すべきだというようなことをいっております。

しかし、労働参加だけが全員参加ではないと思います。今日は、そういういろいろな参加の仕方を考えるという場だろうと思います。この分科会は、各方面で経験をされておられる地域のリーダーとか、活躍されておられる方のお話をお聞きし、そしてそのお話や情報を共有して全員参加への方策などを皆さんと一緒に考えたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。



まずは、高齢社会をよくする女性の会の佐々木照子さんをお願いいたします。佐々木さん、よろしくお願ひします。

佐々木 ただいま御紹介いただきました佐々木照子でございます。私がボランティアに入ったのは50数年前になりますでしょうか。昭和36年、WHO・善意銀行に登録したのが初めてでございます。現在、地域で活動しているのは週1回、日曜日に小学校の家庭科室で調理・配食をいたしております。ボランティアでやっております、平均100食作っておりますけれども、ボランティアです

から強制できませんので全然シフトを組んでおりません。出たい人が出たいときに参加する。小学生から中学生、高校生、それは本当に様々です。

○ボランティア参画意識

調理・配食のボランティアの中には、国家公務員の職員、会社の社長さん、インターナショナル学校の高校生などがいらっしゃいます。今は目黒中央中学校の「しいの木学級」の障害者の子供たちをお受けしています。障害者は調理をできるチャンスがないということで、先生と生徒と一緒に調理実習を兼ねて活動に来ていただいております。

今年は大雪が2回、日曜日にございでしたが、嵐や大雪の日こそボランティアさんが多く参加されます。「こういう日こそ、お年寄りが待っているんじゃないか」「こういう日こそボランティア活動できる人が少ないだろう」という意識を持っていらっしゃいます。

共に支えながら週1回、区の委託を受けまして28年目が終わります。おかげさまでこれまで一度も人数が足りないなどの理由で配食のボランティアができなかったことがないんです。区のほうは委託していますので、「1人も出てこなかったらどうするの」「いいえ。必ず出てきてくださると私は信じています」と。信じることのすばらしさ、力強さだろうと私は思っております。

○公共施設の活性化、家庭科室での調理

この活動は30年続いております。最初はコミュニティセンターで活動しておりましたが、コミュニティセンターは9時からしか使えませんので、区の課長さんの手配で、中学校の調理室を使って活動しておりました。ですが子供が減りまして、8年前に三つの中学校が合併して、活動場がなくなった時、別の中学校に家庭科室の使用依頼をすることになりました。その際、これまで使用していた中学校との契約書がどのようになっているかと思い調べたところ、教育長と区長との契約になっておりました。

これは、ボランティアセンターを立ち上げるときに、ボランティア活動の場の提供は区がすべしという約束を取りましたので、区長がやってくくださったのだらうと思っております。今、上目黒小学校の調理室を毎週使わせていただいているのですが、校長は、「毎週使わせていただいて、綺麗でうれしいです」とおっしゃってくださいました。これも地域の公共の施設の活性化かなと思っております。

○地域を耕す配食での取組

そんな中で、コーディネーターの伊藤さんが是非ということですので少しお話しさせていただきます。前述した学校で行われていた調理・配食のボランティアで、サービスを受ける方に季節の便りをお載せすることになりました。ボランティア活動の場である学校は荒れに荒れておりまして、毎週警察沙汰になったりといろいろ問題がありましたが、その荒れた学校の教頭先生に、お年寄りを思いやる心で友を思いやり、親を思いやり、教師を思いやる心を育むことができないでしょうかとお願いに伺いましたら、快く引き受けていただき、意気投合しまして、美術の先生がこのボランティアを担当することになりました。

美術の先生が担当ですから、こういう絵が出てくるんです。この絵に私がつたない筆で書く。これを配食時にお届けするんです。中にはかわいい絵がありましたので、ボランティアさんが、絵に色をつけたりもっときれいになり喜ぶんじゃないかという話がでたのですが、ボランティアの郵政省職員の方が「僕が配食しているおじいちゃんが、孫の色鉛筆を借りて色塗りして楽しんでいます。1人でもそういう方がいらっしゃれば、塗らないでお届けしましょうよ」という話でしたのでそのまま色を付けずお届けしておりました。

ある日、このような絵が3枚、生徒宛てに送られてきたんです。その絵の中に一筆書かれていたのですが、毎週来る食事を楽しみにしていた母親を見ていた息子さんからのお手紙でした。その息子さんの母親は私たちの描いているその絵を楽しみに待っていたそうです。送られた3枚の絵は、体調を崩して入院された母親が夕食が終わると必ずこれを引き出しから出して色付けしていたというものでした。息子さんが疲れるからやめなさいと言っても聞かなくて、でも、生徒が一生懸命描いてくれているんだから応えなきゃいけないんだということがお手紙に書いてあったそうです。

この絵は半分塗っていないんです。息子さんは、「ここで母の命が切れてしまいました。最後の母の作品ですので、自分の手元に置いておきたい」、というのがお手紙の中で伝わってきました。「でも、母の遺志を継いでお送りいたします。高校受験があつて大変でしょうけれども、あなたたちの今の活動は将来必ずあなたたちの幸せにつながるので、頑張ってください」という手紙を添えて生徒に送ってきた品物なのです。これを当時の教頭先生が御覧になって、号泣されたそうです。

私、この手紙の中の絵を拝見しまして、やはり応えることを忘れてはいけないなと思いました。

何年か前に配食を受けたお年寄りが色付けした絵を300枚お借りしまして、中学校の文化祭に展示させていただきました。かなり前ですけれども、毎日新聞の記事に載せていただきました。それからというのは子供たちが大変豊かに、そしてかかわった子供たちがみんな成功してくれています。私も少し保存させていただいておりますが、こういうことがやはり地域を耕す一つのことだと思っております。

なぜこんなことができたかということはまた時間があつたらさせていただきますが、社会教育の福祉的還元とか、公共の施設の有効利用、地域還元とか、私はいろいろな思いがあつてこの仕事を30年毎週やっ

ております。その幸せを今日お分けできたらうれしいなと思って参加させていただきました。

伊藤 佐々木さん、ありがとうございました。

地域で行っている食事サービスを中心に世代を超えて交流しているという、すばらしいお話でありました。ありがとうございました。



それでは、次に杉さんをお願いいたしますが、画面のほうを見ながら聞いてください。よろしく申し上げます。
杉 それでは、よろしく申し上げます。

私は、社会福祉法人江東園のTQM本部、トータル・クオリティーマネジメントという経営企画管理室の本部長を承っております杉でございます。

江東園ケアセンター「つばき」の話はこの後出てまいりますので、これから御説明いたします。今日のお話は、江東園の概要と、それから御質問票にもございましたが、世代間交流にとっても興味をお持ちになっている方もかなり大勢いらっしゃるようですので、今日のテーマでございます地域支援事業、地域包括ケア、江東園モデルというところに重点を置いてお話をさせていただきたいと思っております。

江東園は東京の一番東の端っこ、江戸川区というところがございます。江東園の名前が、なぜ「江戸川」なのに「江東園」と言われるかですが、江戸の東にあって、一番最初に朝日が昇るところに老人と子供たちの楽園を作りたいということで、「江東園」という名前を初代理事長がつけました。

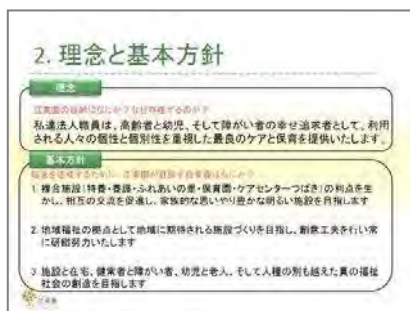
それでは、江東園の沿革でございます。無認可の養老院を建てまして、その後、昭和 37 年に認可を受け、養護老人ホームとなりました。昭和 51 年に、地域ニーズとしてお母様たちが子供を置いて働かなければならないという状況が生まれ出たところで江戸川保育園を開設いたしまして、今までやっております。

昭和 62 年に、江東園は老朽化をしておりました養護老人ホームと江戸川保育園を改築いたしまして、江戸川区で 2 番目の特別養護老人ホームと高齢者在宅サービスセンターの四つの施設を合築いたしまして、昭和 62 年に世代間交流を始めたわけでございます。平成 9 年には認知症対応型の短期入所施設を開設いたしました。

それから、平成 12 年は 2000 年の介護保険の施行により、介護保険と同時にヘルパー事業所を立ち上げました。平成 13 年にゼロ歳児保育を開始したわけですが、江戸川区ではママさん保育というのがとても浸透しておりまして、働く母親のニーズが高まる中で、ゼロ歳児保育が必要だろうということで、前区長の中里区長がゼロ歳児保育を始めたわけでございます。

平成 18 年には、江戸川区には区立の知的障害者の通所更生施設しかございませんでしたが、その中で行政の後押しもございまして、民間初の知的障害者の通所更生施設と老人デイサービスの合築施設を開設いたしました。

○江東園の理念と基本方針



江東園の理念と基本方針を皆様にご覧いただきたく思います。理念というのはミッション。江東園の目的は何か、なぜ存在するのか、存在意義を示したものでございます。私たち法人職員は、高齢者と幼児、そして障害者の幸せ追求者として、利用される人々の個性と個別性を重視した最良のケアと保育を提供いたします。

基本方針は三つございます。複合施設の利点を生かして、家族的な思いやり豊かな明るい施設を目指し、相互の交流を促進しましょう。2番目が、地域福祉の拠点として地域に期待される施設づくりを目指しましょう。

そして、この三つ目が一番大事なところでございますが、施設と在宅、健常者と障害者、幼児と老人、そして人種の別も超えた真の福祉社会の創造を目指しますということで、この三つ目の基本方針の具現化で、今まで世代間交流、そしていろいろな諸活動を行ってまいりました。

○運営事業分野

事業運営の分野でございますけれども、高齢者福祉、児童福祉、障害者福祉、そしてこの後、私たちが目指しておりますのが地域支援事業で、地域包括支援センターを江戸川区から委託を受けておりますので、ここを拠点とし、法人や特養がバックアップをしながら地域支援事業をどのように展開していこうかと数年前から行動に移してまいりました。



○江東園が目指すもの

江東園が目指すものということで、皆様、御存じでしょうか。おばあちゃんと子供が手をつないでいるロゴマークが江東園の象徴でございましたが、一昨年の50周年を機にこのロゴマークを改正いたしました。「お年寄りや子供、ハンディキャップのある方々、そして職員が寄り添って暮らす1本の木。そして、地域に根を張ったその木には幸せの青い鳥がとまります」というロゴマークにいたしました。地面がずっと長く伸びるといところで、大きくは地域をどうするかといところ。地域が江東園のようにいろいろな様々の方々がかわって、地域に根差していこうよという江東園の考え方を象徴するものでございます。



そして、これが象徴するような、子供とお年寄りの施設の中で交流をしている写真でございます。この中には障害者もおります。障害も高齢も幼児もいところで交流を進めてまいりました。



○園内の世代間交流

世代間交流を進めてきたということで、左側が江東園本部でございます。ここには保育園と特養と養護老人ホームと在宅の方々、そしてスタッフを含めて、3世代、4世代がかかわりを持ち、様々な交流が行われてまいりました。交流のプログラムは数限りなくございまして、そのコンセプトは、大家族であったらどんなことができるかといところがコンセプトでございます。



そして、右側の施設は、平成18年に知的障害者の通所更生施設を2階に、3階に老人デイサービスセンターを設置いたしました。老人と障害者のかかわりがここでもとても色濃く行われてまいりました。障害者はお年寄りの前だととても素直になりますし、そして、食事でも口があかないお子さんも老人がスプーンを差し出すと口をあけてくれたり、それから、お年寄りたちは障害者が来るのを楽しみにして、一緒にここで盆踊りを踊ったり、陶芸をしたり、生け花もやったり、いろんなことがここで行われております。



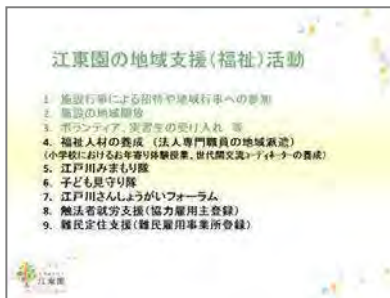
これが本部のほうで撮りました集合写真でございます。保育園児とスタッフと高齢者が集まって毎年1回集合写真を撮りますが、このようにして3世代、4世代、5世代になりますかね、そのぐらいの年齢の幅がございますが、交流を続けてまいりました。

○地域支援事業、地域包括ケア

今日の第1分科会の本題でございます「地域社会活動の活性化」、そして「地域支援事業」、「福祉事業」とわざわざ書かせていただきましたが、「地域包括ケア江東園モデル」というのでお話をさせていただきます。



皆様、御存じでしょうか。国のいう地域包括ケアシステムというのがございますが、医療、介護、そして予防を含む24時間365日、切れ目のない在宅サービスを作っていきたいということで、連携を図って地域社会を皆さんで24時間支えてまいりましょうという図式なんです。が、どうも医療と介護に特化するようなシステムだと私は思っておりますので、江東園バージョンというところで、江東園の地域支援福祉活動という形を地域包括ケアになぞらえて私どもは活動してまいりました。



1番目、2番目、3番目につきましては、よく特養がやっておりますね。2,500人を超えるボランティアが施設の中で活動していらっしゃいます。施設への招待とか、行事への参加とか、施設を地域開放するとかということは、地域の社会化のところからずっと進められている事業でございます。

○高齢者体験授業への取組

まず4番目ですが、高齢者体験授業です。施設には専門職がいっぱいおります。ケアマネジャーもおれば、看護師も介護福祉士もおります。調理員もいれば、運転士もいます。運転手もヘルパー2級を全部取らせていますので、近くの小学校に行って高齢者の体験授業をしております。目の見えない高齢者とか、車椅子で坂道を下るときの怖さとかを小学生に体験していただくということですが、年に2回ほど小学校2校に出向いて行って、体験授業をしております。



これは一つには、子供たちのチャレンジ・ザ・ドリーム。夏休みの間に高齢者体験に来るとか、ボランティアで施設にやってくるということもあるんですが、まだまだ子供たちが高齢者とか障害者を知ることが少ないので、体験してほしいということと、これから子供たちに福祉の人材の担い手になってほしいという願いも込めてこの授業を行っています。



○世代間交流コーディネーター養成講座の開催

次は、世代間交流コーディネーターの養成講座を開いております。2007年から世代間交流協会をNPOで立ち上げました。その立ち上げ発起人の私が、白梅学園大学と連携いたしまして、世代間交流コーディネーター養成講座の見学研修場所として、今年で8年になりますから、行ってまいりました。毎年20名ほどの受講生が、社会人、学生、それから企業の方々、大学の教授とか、そういう方々もおいでになります。これから地域のいろいろな交流をするときにコーディネーターが必要になるのではないかとというのが世代間交流協会の考え

でございます、これを続けていくことによって、地域のこれからのつながりを上手にコーディネートするコーディネーターが各地にいれば、とてもスムーズな交流ができていくのではないかと考えております。

○「江戸川みまもり隊」による単身高齢者サポート

次に、私どものとても大切な「江戸川みまもり隊」でございます。これは、江戸川総合人生大学の卒業生さんと有志の方々を中心に地域のボランティアグループを作って、平成23年の7月から江東園の所在地のある江戸川1丁目、2丁目を主に単身高齢者、先ほど樋口代表がおっしゃってありました孤独死、孤老死をなくそうと立ち上がってくださったボランティアグループでございます。それを私どもの地域包括支援センターと特養がバックアップいたしまして、施設の隣にホームヘルパー事業所が空きましたものですから、その場所を提供いたしまして、今活躍をいただいています。



自主運営、自主行動。地域包括支援センターからの情報をもらって動いたわけではなく、今、活動協力者は30名おりますが、訪問対象世帯が501世帯、単身が284世帯、老老世帯が217世帯に上ります。活動は毎週3日で、水曜、金曜、土曜日に行っています。

江戸川総合人生大学というのは、10年前、平成16年に江戸川区が、今の多田区長が、この先の地域の担い手になるコア人材を育てていこうということで、学校法に則らない学校でございますが、2年課程でございます。もちろんお金も幾ばくか授業料をお払いして学んだ方々でございます。とても意欲的な方々で、勉強をしようとする意欲に燃えた方年間100名ほどがこの総合人生大学に通い、そして地域のコアリーダーに育っていただいております。

これは、玄関先で皆さんにお声をかけて、みまもり隊便りを配っているところでございます。

活動としては、地域サロンを地域のお茶の間という形で、毎月1回、最終の金曜日の10時から15時まで実施しております。単身世帯の老人ですとか、老老世帯の方々がここにお立ち寄りになって昼間お過ごしいただくということで、たこ焼きを焼いているんでしょうか、ホットケーキでしょうか、いろいろな作業をして楽しんでお帰りになっていらっしゃいます。

それから、江戸川みまもり隊便りを月1回発行しております、これも全部皆様が手づくりでお作りになったものを今お配りしていらっしゃいます。数年前からとても夏が暑くて、熱中症予防を呼びかけておりますけれども、今年は大塚製薬とコラボいたしました、塩分の入ったポカリスエットをただで提供いただきました。そして今、お配りしている最中でございます。

皆さんの考え方は、「夢、希望、継続」だよという気持ちで、こういう言葉を書いていただきました。



○障害者による「子ども見守り隊」



これは、「子ども見守り隊」というのが、江戸川区の環境部の環境促進課でしょうか、安全・安心の施策の一環でございまして、登下校のときに地域の見守りをしようよということで、地域の住民の方々、それからPTAの方々が出て見守っていただいておりますが、これは障害者でございまして、知的障害者が何か地域に役立つことはないかと考えまして、2008年から見守り隊の腕章が江戸川区で配布されましたのをいち早くいただきまして、腕章をつけて散歩に出しております。20人、30人と散歩に出れば抑止力にはなるのではないかと。障害者も国からただでお世話になるだけではなくて、世話する存在にもなるんだよということで、腕章をつけて散歩に出しております。



エプロンをかけている方々が、江東園ケアセンター「つばき」の有償ボランティアのサポーターさんでございまして、知的障害者のほうに1日5名ほど入っていただいて、有償ボランティアで10時から16時まで障害者をマン・ツー・マンでお世話していただいております。

○知的・身体・精神の3障害をつなぐ「江戸川さんしょうがいフォーラム」

次が、「江戸川さんしょうがいフォーラム」というのを3年前に立ち上げました。江東園ケアセンター「つばき」の中で任意団体で立ち上げました。26年の7月現在で12団体、68名の会員さんが登録していただきました。「どのような障害があっても1人の人として尊重され、自分らしく豊かに暮らし続けられる地域社会の創造を目指して」ということです。



私、障害者支援に取り組みまして、高齢者は介護保険が入りまして大分いろいろなサービスが入っていますが、知的障害者とか障害者というのはまだまだ地域認知がされていないんだなというのをつくづく感じました。そして、「さんしょうがいフォーラム」は、知的・身体・精神の3障害を含めた横の連携を作っていこうという思いと、それから障害者認知を地域に広げたいという思いから、「江戸川さんしょうがいフォーラム」を立ち上げたわけでございまして。

「江戸川さんしょうがいフォーラム」を立ち上げたわけでございまして。

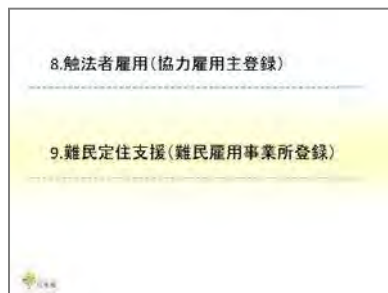
そして、1年目は、左側でございますが、「被害者意識から当事者意識へ」。障害者というのはともすれば被害者意識しかないんですね。私は、被害者意識を持っている間は本当の意味で自立しない、社会の一員となれないよという考え方を持っておりまして、それを当事者意識に変えようということで講演会を開きました。

2回目は、今、まさに本当に問題になっているのは、各地域で学級崩壊も招かれているのではないかと。「発達障がい児・者を支える地域社会とは？」ということで、1人1人に合ったトータルなシェアを考えようということで、昨年2回目を開きました。

今年は第3回目で、研修会を開くわけですが、今年の1月に国連の障害者権利条約をようやく日本も批准いたしましたのを受けて、インクルーシブ社会がこれからやってこなければいけない、目の前まで来ております。そして、教育界もインクルーシブ教育というのが学校に入ってまいりますのを受けまして、地域は障害を排除するのではなく、受け入れながらみんなが支援者にならなければいけないという思いで、この8月30日に研修会を開くつもりでございまして。

○触法者雇用と難民定住支援

そして、この後、江東園が目指しているのは触法者雇用でございます。法を犯した者は、出てきても仕事がないと再犯を繰り返す。それを法人が協力雇用主となって職についていただくということも考えておりますし、難民定住支援、これもハローワークですけれども、難民の雇用も受け入れていこうというふうに思っています。



○地域におけるノーマライゼーション

もう一度、理念と基本方針をお出しいたしました。二つ目と三つ目の方針でございますが、三つ目はノーマライゼーションなんです。どんな人も差別されず、子供からお年寄りまで、障害も含めて、どんな顔の色の人も、目の色の人もみんなと一緒に地域を作っていこう、みんなで暮らし続けていこうというのが江東園の方針でございます。

そして、世代間交流の利点を江東園は施設の中ではほとんどクリアしておりますが、これから諸問題を解決するということでは、6番目の社会問題の解決に私たちが着手をしなければいけないときだと思っております。それは、先ほどお出しいたしました子供の問題は児童虐待、それから高齢者の問題は高齢者虐待、認知症の問題、若年性認知症の問題、いろんな問題が社会の課題として浮き彫りになってまいりました。

それから、例えば所得の二極化というのがありますね。そして、生活保護世帯の子供たちは今、塾に通えないがゆえに、中学に入っても九九が言えないような子供もいっぱい学校におります。そんな社会の課題が山積する中でどうやって解決していこうかというのが、私たち法人の使命と思っております。

最後にお話ししますが、多世代共生社会の実現を目指して、私たち江東園、社会福祉法人の使命は、これは経済学の博士が言った言葉だと思いますが、人間を経済的な一面だけではなく、人の幸せのため、人の笑顔を見るために活動する多面的な存在として捉え、社会的利益や貧困軽減を追求するソーシャルビジネス（社会福祉事業）が重要であると私はかねがね考えておりました。経済は金儲けだけではないんです。人の笑顔や人の幸せを願って活動するのが社会活動だと私は思っております。どうか皆様もこれからそのような社会活動にお力添えいただければ幸いと存じます。

ご清聴ありがとうございました。

伊藤 ありがとうございます。ビジュアルを用意していただいたものですから、盛りだくさんでございました。ありがとうございました。

それでは次に、さわやか福祉財団の丹さんをお願いいたします。特に丹さんは、東日本大震災の復興の支援とかというところで大分お力を発揮されたようでございます。よろしく願います。

丹 さわやか福祉財団の丹と申します。

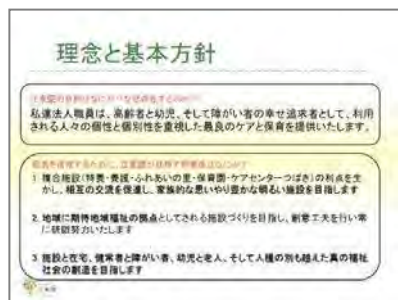
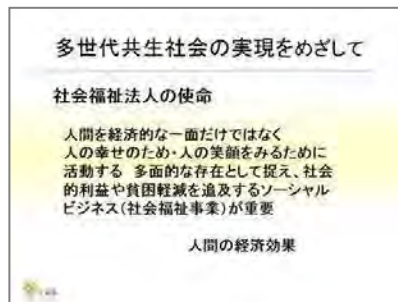
杉さんと違って、私はアナログ人間なものですから、パワーポイントではなくてお手元に資料を配らせていただきましたので、大体それに沿ってお話をさせていただきます。

私はさわやか福祉財団のボランティアスタッフとして19年目になります。さわやか福祉財団というのは何をやっているかということと高連協の二人代表でもあります堀田力が23年前に法務省を退官してすぐ立ち上げた財団です。堀田は役人をやったわけですから、高齢化の問題に大変意識を持ちながらも、現場の支え合いをすることはできないが、全国にそういう現場をやっているボランティアの人たちがいる、あるいはそういう人たちをこれから作っていくというような仕掛けならできるんじゃないかと考えました。元役人だからそういう仕組みづくりを自分ではできるんじゃないかということで一生懸命勉強し、ボランティアで地域の助け合いを進めている人と連携し、研修をやったりして23年が経ちました。

私も19年目になるんですけども、他と一緒に仕事をしながら、さわやかの理念で全国で活動してくださっている方々と一緒に勉強したり、接触したりする機会があります。これは非常な楽しみで今までやってきたということなんです。

○変化する介護保険

さわやか福祉財団自体は東京を拠点とした、35人ぐらいのスタッフのうちボランティアスタッフが半分ぐらいのささやかな財団です。時々電話がかかってくる、「ちょっと親が介護が必要だけど、来てくれないか」という電話があるんですけど、残念ながら、こちらはそういう現場のケア自体をやっているわけではないので、お所をお聞きして、その近くのさわやかのインストラクターの方を紹介したりします。



インストラクターの方は、介護保険が始まる前は草の根的な地域のケア、介護の活動をボランティアでやっていたところが多かったのですが、御承知のように介護保険が始まった、NPO法ができたという時期を経て、法人格を取って介護保険事業に参入するところもたくさん出ました。

しかし、今日の堀田の話にもありましたように、介護保険が今大きく変わろうとしています。見方によれば、介護保険ができる直前の状況に、改めて原点に戻ってきたという変化を感じます。つまり、要支援が地方自治体の方にこれから2年半ほどかけて移行していくわけですが、そうすると、制度としての介護保険のほかに、比較的軽い部分は地域で支えるという時代になってきます。地域の担い手が必要になるわけで、二十数年前にボランティアを広げ、あるいは立ち上げて自分らで支えていこうとした時代の原点に戻っていくような面が今あるんじゃないか、こういう認識を持っております。

○「縁」「危機意識」「参加」の三つのキーワード

私のいただいた時間の中で今日お話ししようと思ったところのキーワードを3点考えました。一つは「縁」ですね。縁側の縁です。2番目は「危機意識」です。3番目は、今日のテーマでもあります。が、「参加」です。この3点です。

私なりに19年ほどさわやかで仕事をしてきて、片方で、私は横浜市に住んでおまして、横浜からさわやかのある東京まで通っていて、自分の地元はどうなんだというのがいつも気になっていたわけなんですけれども、幸い、さわやかに参加してしばらくしてから、私の地元でも任意団体を助け合いをやるボランティア団体が立ち上がりました。「さわやか港南」というんですけれども、縁があってそこにもメンバーになって、今はそこの理事会なんかに参加して、自分のところの地元の問題も一緒に考えております。

○4団体のつながりから生まれた新たな「縁」

1番目に「縁」と申し上げましたのは、これから介護保険が始まるという時代に、介護保険の制度が始まって対象にならない部分をボランティアで支えるという仕組みはどうしても残る、必要になっていくから、地域で助け合いのボランティア活動をやっている全国組織へ呼びかけてネットワークづくりを進めようと。そういうプロジェクトを立ち上げ、担当することになりました。

一番最初に全国社会福祉協議会という福祉の御本家みたいなところに行きました。それから、日本生活協同組合連合会の本部に行きました。その次にJA—農業協同組合中央会に行きました。

これは、世間では意外と古くさい団体とされているんですが、地方に行きますと、配食サービスをやったりしているボランティア団体を持っているんです。当時は、全国的に男性も参加し、ボランティアとして助け合いをやっている大きなところ、さわやかと四つが組んで、介護保険後の地域ネットワークづくりを一緒になって考えるフォーラムをやりました。

4団体が一緒になって、フォーラムやってみますと社会福祉協議会の人、地域で農業、農家の方が助け合いをやっているなんていうことは知らなかったり、農協の人から見ると、生協というのは都市部でお店をやっているコンビニみたいなものだと思ってたようです。生協が助け合い活動の組織を持っていて、ボランティアをやっているということも知らなかった。一緒に集まってみるとお互いのことがわかってきた。つまり、ネットワークの始まりです。

このようなことを経験して、日本流に言えば、「ご縁がありますね」の縁かなと思います。人の縁を地域で作っていかなくてはなりません。東日本大震災でも絆があるところは助かったなどよく言われますけれども、高齢化という大きな課題が迫ってくるわけですから、お互いの地域の縁をこれから意識して作っていかないといけないのではないかとつくづく思っております。

○危機意識の共有による地域ネットワーク

2番目に申しました「危機意識」は、皆さん言わずと知れている高齢化率です。20年近く前に、私はこれも縁があって地域の自治会に参加し、自治会長とかをやらされたわけなんですけれども、そのころに比べると住民の方の危機意識がものすごく高まっています。つまり、これから10年先、自分のところの地域はどうなるんだろうか、という危機意識があります。

私は、先ほど述べました、さわやかの地域ネットワークづくりのプロジェクトをやっているときに、島根県の松江でフォーラムを行いました。地域のネットワークを呼びかけに行っただけです。松江市の郊外に淞北台団地といって600件ぐらいの団地があります。これは昭和30年代にできた住宅団地で、松江の郊外ですから、公務員とか、サラリーマンとか、割に意識の高い人が住んでいるところなんです。

そこでフォーラムをやったのが平成14年ですから、今から12年ぐらい前です。今から12年ぐらい前に、70代ぐらいの自治会の副会長さんが、自治会としてもうどうしようもなくなってくるから、独立した助け合いの組織を作ろうということになって、副会長さんがそのリーダーを引き受けた組織ができたばかりのところでした。

まずやったことは、自分の地域の600件ばかりの人がどういうふうを考えているか、これはよくやることなんですが、アンケート調査とヒアリングで課題抽出を行いました。高台の住宅団地なものですから交通の便が悪い。買い物に行くにも、病院に行くにも坂をおりて大分歩かなければならない。バスが来ないんですね。

ということで、これがそのころは筆頭の課題だったんですけども、皆で議論して、ワンコインで乗れるような循環タクシーを団地内の所々にとまっていけるものを作りました。これは社会福祉協議会も幾らか助成してくれたようですけども、交通の問題を解決した。

そのころ作っていたのが集会所です。これはみんなでお金を出し合って、これからは家に引きこもらないように寄り合いの場所が必要だということで集会所を作っていました。私が行った直後にそれができたようです。

よくアンケートなんかで課題抽出をやるんですけども、感心なのは5年ごとに定期的に調査しているんですよと聞いたものですから、それから2サイクル経った10年後に、高橋さんというリーダーの方に電話してみたところ、きちんと5年ごとにアンケートを行っていました。5年ごとに地域の課題が変わってくるというんですね。

3年ぐらい前に電話で「今どうしていますか」と伺ったところ、やはりこの団地も高齢化が進んで、みんな70代、80代になってきたものだから、ちょっとした電球の取り替えとか、掃除・洗濯も含めて家事ができなくなった人が増えてきた。そこで、自分らのボランティアで従来やってきた助け合いも限度が来たからどうしようかと。

それで、島根県生活協同組合連合会に連携を呼びかけました。そうすると、生協は、協同組合というのは組合員限定でサービスをする原則になっているのですが、同じ地域なんだから、組合員でなくても助け合いはサポートすべきだという結論になったということで、少しややこしい家事、洗濯といった部分は島根県生協がいわゆる有償ボランティアですが、1時間500円とか、600円で入ってくれるようになりましたという話なんです。つまり、地域ネットワークです。生協と連携して自分らの課題を解決しているという、危機意識を共有すると地域ネットワークにもつながってくるということです。

○地域活動への参加と仕組みづくり

3番目のキーワードとしては、今日のキーワードである「参加」だと思います。自分のできる範囲で高齢になってもできることは湊北台団地でも皆さんやっているわけです。問題はそれから先なんですけれども、今日いらしている皆さんのところはどうか。調べてみると地域にはいろんな活動団体、組織があります。利用者以外には意外と知られていないことがあります。それをつないでいくといろんな可能性が見えてくる。そこで参加する人の範囲も広がってくるということを感じます。

キーワードとして、ネットワークにつながる「縁」を大事にしたい。2番目に、その前提として地域の「危機意識」、自分のところはどうかということを感じたい。3番目に、危機意識を共有するだけでなく、自分で動くという「参加」を呼びかけたい。行政も介護保険も参加の仕組みを入れてきました。せっかく消費税を上げた財源があるわけですから、一定の居場所とか何かの基盤整備にはお金を出しますよと。それを自分のところの自治体で、今のうちから自分らも参加するからいい仕組みを作ろうよと是非呼びかけていただけたらと思います。

ありがとうございました。

伊藤 ありがとうございました。

次に、渡邊さんをお願いいたしますが、渡邊さんは、実は昨年のフォーラムで私の席、コーディネーターをなさっております、十分何回もこういう席でお話をしておりますが、また新しい切り口で今日はお話をいただけそうです。よろしく申し上げます。

渡邊 ただいま御紹介いただきました渡邊でございます。